

胸郭出口症候群等に関するテストの種類（主なもの）

テ ス ト 名	手 技	陽 性	機 序
1. Adson Test (アドソン試験)	患肢を垂直に垂らし、頭を患側（又は健側）に回旋し、その位置で頸椎を後屈させ深呼吸で止める。	患肢の橈骨動脈の拍動が減弱し、上肢の症状が増悪する場合。	鎖骨下動脈及び腕神経叢の斜角筋三角部での圧迫による。
2. Wright Test (ライト試験)	肩関節を90° 前方挙上し、肘関節を90° 屈曲して肩関節の外（そと）分廻しを強めていく。	患肢の橈骨動脈の拍動が外（そと）分廻し90° 以下で消失し、上肢の症状が増悪する場合。	鎖骨下動脈、腕神経叢の烏口突起小胸筋部及び肋鎖間隙での圧迫による。
3. Attention Posture Test (気をつけ姿勢試験)	気をつけ姿勢をとり、できるだけ肩を下げる。	患肢の橈骨動脈の拍動が消失し、上肢の症状が増悪する場合。	鎖骨下動脈及び腕神経叢の肋鎖間隙部での圧迫による。
4. Spurling Test (椎間孔部圧迫試験)	頸部を患側に側・後屈し、頭部を頭頂より圧迫する。	患側上肢の症状が増悪する（特に放散痛がある。）場合。	頸神経根圧迫刺激による。

(評価について)

○1. 2. 3. のテストのすべてが陰性の時には、胸郭出口症候群は否定できる。

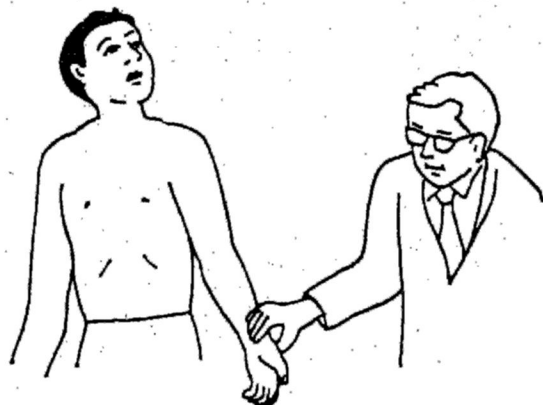
○1. 2. 3. のテストのすべてが陽性の時には、素因に基づく胸郭出口症候群の可能性が大きい。

○Adson Testは二次的に斜角筋が攣縮を起こしている場合にも陽性に出ることがある。

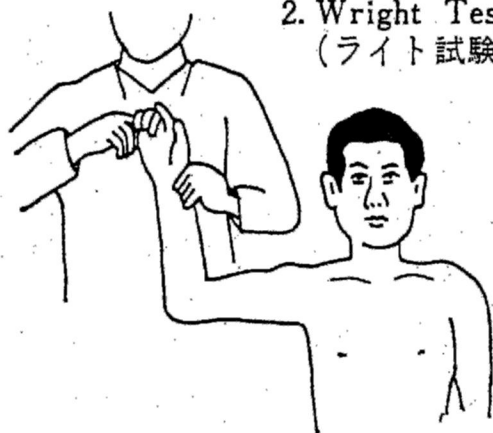
○Spurling Testは頸部の変形性脊椎症又は椎間板ヘルニアの場合に陽性となる。

○拍動の変動はPletysmography（指先容積脈波）により記録されることが望ましい。

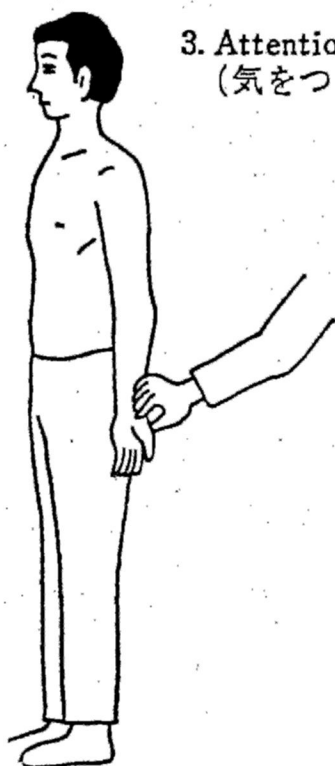
1. Adson Test
(アドソン試験)



2. Wright Test
(ライト試験)



3. Attention posture Test
(気をつけ姿勢試験)



4. Spurling Test
(椎間孔部圧迫試験)

